研究短報文

朝鮮忠清北道仰城面陵岩里産灰重石の結晶

Scheelite crystals from Ryoganri, Korea

理學博士 原 田 準 平 (Z. Harada)

朝鮮忠清北道仰城面陵岩里からは、從來灰晶石の美晶を産する。筆者は、嘗て本産地の結晶に就き、その屈折率を測定し、之を發表した¹⁾。

本産地の結晶は、主として $e(101)$ よりなる、擬八面體複錐の單晶であることが、從來報告されて居り²⁾、又最近發行された新編朝鮮礦物誌上に於ても、單に $e(101)$ よりなることが記されてゐる³⁾。

筆者が、此度得た本産地の結晶を見るに、多くは $e(101)$ のみよりなるが、結晶によつては、 $c(001)$ 、 $p(111)$ 、 $h(313)$ 及び $s(131)$ の諸面の存することが觀察された。

茲に簡単に、之を報告することとする。

本産地の結晶は、半透明乃至不透明で、白色、飴色、草綠色、灰黑色等を呈する。尙結晶によりては、白色のものと、灰黑色のものとが、明瞭な累帶構造をなす。尙結晶の外被部は飴色を呈するも、核心部は白色にして、その境界明瞭ならず、次第に移化するものもある。之は外被部に重石華⁴⁾の含有せらるゝに基くものであらう。

包裹物として、鐵滿俺重石の小結晶が、含有せられることがある。

結晶は、時に巨大のものがあり、徑8糎にも達する²⁾と云ふ。筆者の今回得たものゝ最大の結晶は、徑5糎である。

1) 北大紀要, 第4類, 第2卷, p.p. 285~6(昭和9); 本誌第12卷(昭和9) p. 163.

2) 朝鮮礦床調査要報, 第2冊(大正11), 朝鮮礦物誌, p. 103.

3) 朝鮮礦床調査要報, 第15卷(昭和16), 朝鮮礦物誌, p. 354.

4) 片山信夫: Beitr. z. Mineralogie v. Japan. N. F. Bd. II (1937), p. 132.

その結晶面の性質を見るに, $e(101)$ は本産地の結晶に於ける主面であり, その發達は著しい。平滑のこともあるが, 多くは, 面上に無数の天然蝕像と (121) に平行の無数の條線を有し, 更に微斜面も存在する。その天然蝕像中には, 不等邊三角形の蝕凹を觀察することが出来る。

$c(001)$ は稀に存し, その面は極めて粗鬆で, 反射光像が得られない。 $p(111)$, $h(313)$ 及び $s(131)$ の諸面は, 何れも狹小であるが, 然し平滑である。

結晶の形態は, 不規則な面の發達のために全く非對稱的になつてゐることが多い。比較的結晶面の發達よきもの三個を選び, その結晶圖を次に示す。

三個の結晶について測定し得た面角は次の如くである。

面 角	實 測 値	計 算 値*
$101 \wedge 313$	$15^\circ 33'$	$15^\circ 36'$
$313 \wedge 111$	$24^\circ 21'$	$24^\circ 22'$
$111 \wedge 131$	$28^\circ 15'$	$28^\circ 21'$

* Dana's "A System of Mineralogy" に據る。

I 結晶は, その結晶形態が, 比較的整正であり,

$c(001)$ $e(101, 10\bar{1}, \bar{1}01, 011, 01\bar{1}, 0\bar{1}1)$ $h(313, 31\bar{3})$

I 結 晶

II 結 晶

III 結 晶

陵岩里產灰重石

が觀察される。

II 結晶では、二個の個體が、平行成長をなしてゐる。

甲個體 $e(101, 10\bar{1}, 011, 01\bar{1})$ $p(111)$

乙個體 $e(101, 10\bar{1}, 011, 01\bar{1})$ $h(313)$ $p(111)$

III 結晶にては、次の諸面が存する。

$e(10\bar{1}, 011, 01\bar{1})$ $h(31\bar{3})$ $p(11\bar{1})$ $s(131, 13\bar{1})$

本産地の結晶の多くに就いて、詳細な研究をなす時は、更に得る所があらう。(北海道帝大理學部地質學鑛物學教室)

評 論 雜 錄

濠洲及び新西蘭の金屬礦床 (I)

Metallic deposits in Australia and New Zealand (I)

理學博士 渡邊 萬 次 郎 (M. Watanabé)

大東亞圈の一翼として、濠洲並に新西蘭が新に注目を惹くに至つた。ここにそれらの主なる礦物資源中、金屬礦床に關する部分を文獻によつて通觀し、その大勢を窺はう。

濠洲及新西蘭の地理的大勢

濠洲及び新西蘭は西濠洲の高原地帯を核心として、濠洲中部の低地帯、その東岸の隆起帶、珊瑚海及びタスマン海の陷沒帶、更にニューギネア、ニューカレドニヤ、ニュージールランドの隆起帶と、太平洋に向つて凸出した同心弧狀の起伏帶が、西部即ち中核部を海上に出して大陸となし、周縁即ち東北の起伏一層烈しい部分を内海となし、島嶼となした部分である。

このうち西端の核心部は、太古の褶曲による隆地帯が、長期の削磨作用を被つて生じた大陸的の殘骸であり、東側外縁の隆起帶ほど新興造山地帯である。即ち本大陸の西側三分の一を占める西濠洲は、主として寒武利亞紀